

まだまだ寒い日が続きますが、立春も過ぎ、日も長くなってきた今日この頃、いよいよ待ちに待った春が少しずつ近づいてきたような感じがします。

ただ、空気の澄んだこの時期のアウトドアでの活動もまたいいものです。

春になってから…と思っている方は、是非一度参加してみてください。きっと、いい思い出ができることでしょう。それに、自分に自由になると言う時間は、そんなにはないものです。今の時間を大切に！

イベント案内

カニかにツアー

～思う存分カニを味わい、温泉でゆっくりと疲れを癒し、宴会を楽しみましょう！～

日 時 : 2月27日(土)～28日(日) 午前9時30分集合
目的地 : 京都府・久美浜/民宿旅館よしのや【Tel 0772-83-0450】
集合場所 : JR千里丘駅 [JR京都線・大阪駅より普通で約15分]
(改札を出て左前方の階段を下りた所。喫茶店CITYの前。)
予 算 : ¥23,000-
連絡先 : 栗原隆一

第3回スキーツアー

～突然ではありますが、みなさまの声にお答えして、今年もスキーツアーを企画しました。
スキー、スノボ初めての方もいっしょに行きましょう！～

日 時 : 3月6日(土) 5日(金)午後11時集合・深夜出発
目的地 : スキージャム勝山(福井県) [積雪の状況により行き先変更あり。]
集合場所 : JR千里丘駅 [JR京都線・大阪駅より普通で約15分]
(改札を出て左前方の階段を下りた所。喫茶店CITYの前。)
参加費 : ¥6,000-(リフト券、食事代は個人負担。)
連絡先 : 栗原隆一
参加希望の方は2月25日までにご連絡ください。
その他 : スノボ全面滑走OK。温泉に入って帰りましょう。
日帰りです。6日夜には大阪に帰着予定。

早春のハイキング

～ゆっくりハイキングで春を満喫～

日 時 : 3月20日(土)
目的地 : 鶏冠山 [けいかんざん] (滋賀県・琵琶湖南岸 / 491m)
参加費 : ¥4,000-
連絡先 : 栗原隆一
参加希望の方は3月10日までにご連絡ください。

4月のイベントは10日に予定しております。いよいよ暖かくなってくるこの時期、お花見をかねてのデイキャンプでもどうでしょう？

また、ゴールデンウィークには「四万十川カヌー&キャンプツアー」を2泊3日程度で計画中です。最後の清流と言われる四国の四万十川で、カヌーツーリングにゆったりキャンプでもいかがでしょうか？

イベント報告

(NO. 28)

新春のハイキングと温泉ツアー

大阪府・剣尾山～汐の湯温泉 1月30日(土)

暖かい冬の日差しのなか、爽やかなハイキングとなりました。

大阪の北、能勢に入り、いくつかのトンネルを抜けると、それまでの景色とは一変した。大きく広がった視界に、うっすらと雪をかぶった山々が飛び込んできた。途端に寒さを感じ、車の暖房を強めてみたりする。まもなく、目指す剣尾山(けんびさん)のふもと能勢の郷についた。ここに車を置いていよいよ出発だ。さすがに空気は冷たく、身も引き締まる。10分ほどで登山道の入り口に着いた。

登山道には昨日降ったのであろうか、雪が5cmほど積もっている。

こんな雪道を歩くのも久しぶりだ。一步一步踏み込めば、「キュッ。」としまる雪の上を歩いていくのもなかなか気持ちよく快適である。

そんなに歩かないうちに、汗がふきだしてきて途端に上着がじゃまになってくる。みんなの口数も減り、足取りも重くなってきたときに休憩。まだそう登ってないが、なかなかの眺望である。

休憩を入れれば、体力も回復するもので再び歩き始める。天気もよく、木々の間から差し込む明るい光は暖かく、枝に積もった雪を落とし始めた。

雪景色の中をゆっくりと歩き、何度か休憩を入れようやく頂上へとたどり着いた。

周りにさえぎるものがないすばらしい眺めである。

ここでは、やはりビールで乾杯だ。寒くてもゴクゴク飲めてしまう。

昼食を終えると、身体が冷えないうちに、と上ってきた登山道に戻る。
メシも食ったし、ビールも飲んで後は下るだけなのでみんな足取りも軽い。次に目指すは温泉だ。

汐の湯温泉の熱い湯につかれば、疲れもとれて気分爽快。
帰りは、渋滞につかまり予定を遅れたが無事に千里丘駅に到着。
充実したハイキング&温泉ツアーでした…で解散。となるはずでしたが、遅くなったし晩メシでも食べていきますか…と言うことになり、ほとんどの方が残って2次会へ。

初参加の方も何人かおられました、ここでは、もうみんな打ち解けて飲んで騒いで、ハイキングの時よりも大いに盛り上がったのでした。
さて、これでもう解散となるはずではありましたが…。夜はこれから…。

この日のメインは何であったのでしょうか？確かに充実した1日ではありましたが…。
みなさま、お疲れ様でした。

(栗原隆一 記)

T e n t S i t e

このコーナーでは、みなさまからのお便り・情報等を紹介していきます。コーナー名も仮に「T e n t S i t e」としましたが、何かいい名称があればつけてください。
さて、今回は三島さんより紀行文が届きました。みなさまもドシドシ送ってください。
お待ちしております。

秘 境

朝4時に目覚ましが鳴る。薄暗い中、眠い目をこすりながらテントから這い出す。昨夜、眠りにつく前に組み立てておいたファルホークのフォールディングカヤック450Tに食料、カメラ、酒、飲料水等を積み込んで担ぎ上げ、谷の下の瀨峡に下りて行く。川辺に到着すると重いカヤックを肩から下ろし、すぐに水面に浮かべて乗り込む。まだ人間界の活動は始まっていないので、聞こえてくるのは、川の流れる音と小鳥のさえずり声だけである。殆ど流れの無い瀨場に、挺は音もなく滑り込むといった感じで進んでゆく。ここは谷底に出来た水深20Mもある巨大な水たまりなのである。まだ薄暗いのと、もやのせいで遠くは良く見えないが、今いる溪谷の底から両側にそびえ立つ峰峰の高さは優に500mは超えている。先に進んで行くにしたがって鳥たちのさえずり声もいっそう大きくなってきたようだ。波がないので水面は鏡のようであり、地上の世界がまるで鏡写しになっている。パドルを漕ぐのも遠慮したくなるような静寂である。何千年、いやおそらく何万年も前から繰り返されている朝なのであろうが、他所ものの自分にとっては、この朝は新鮮で全くの別世界であるように感じられる。どこを向いても人工の建造物などが無い、この溪谷の自然に溶け込んでゆく様な気分を味わいつつ、日頃の煩悩がいったいどんな意味を持つのか？などと本気で考える。

気がつくと空は大分明るくなり、溪谷の上の方には日が射している。日が当たるまで森を支配していたもやが、浮き出して空へ消えてゆくのがみえる。もやの正体は空気中の水蒸気であり、ほんの少しの熱を日光から与えられ、あたかも生きているように谷間の寝床から起き出して上空に向かって行き消えてゆく。そしてまた夕暮れとともに、どこからともなく彼等は現われるのである。何日も日照りが続いているが、この森の木々が生き生きとしているのは、夜の間にもやから水分をとっているせいかもしれない。ここから見える森の木の数の多さも驚異的ではあるが、そこに住む動物、鳥、昆虫、野草、苔、シダの部類や微生物などが無数にいる事を考えに入れると、自然とは大変に豊かな存在であること思い知らずにはいられない。



そろそろ船出してから1時間位になるであろうか。腹が減ってきたので、程良い河原を見つけて上陸し朝飯にする。携帯コンロで作ったカレーライスと味噌汁に缶ビールと、朝から豪華なメニューである。きれいな空気を吸いながらの食事は本当にうまい。腹を満たして再び水上に戻る。すでに夏の到来を予感させる様な日差しが水面を照らし始めている。先程まで幻想的であった水上の世界はどこかに消えて、森は目をさまし、そよ風にゆられている。

出発地点から大分下流まで来てしまったようだ。殆ど流れのない瀬場ではあるが、かれこれ1 km位は下って来たであろうか？このまま流れにまかせて川を下って行きたいと思う心を抑えつつ、パドルをひと掻きして艇を上流に向ける。この艇はフォールディングタイプ（折り畳み式）であるが、スマートな流線型なので水の抵抗は殆ど受けなくて済む。したがって少し位の流れであれば川を遡ることができるのである。先程まで漂う様に流れてきた水面をたどり、出発地である田戸をめざす。

カヤックに乗るとまず気がつくのは目線が低くなり水面が驚く程近くなることである。川の中にアマゴであろうか、数十匹の小魚の群れが見える。普通、魚は人間が近寄るとすぐに退散するのであるが、ここでは手でさわれる程まで魚に近づいても、すぐに逃げて行くことはない。彼等はより自然な状態、つまり人間に対する警戒意識が殆どない状態なので、人影が近づいてもほとんど恐怖心を抱かないのである。

冷えたビールを楽しみながら田戸へ戻ってきた。もうすぐ観光用のジェット船がやって来る時間である。エンジン音を轟かせながら溪谷を進む観光船と多くの観光客のおかげで、昼の間しばらくここは秘境ではなくなる。しかし夕方、観光船がいなくなると溪谷は落ち着きを取り戻し、再び本来の姿を見せ始めるのではあるが、このまま長居をすると、せっかく日常を忘れていた心が元に戻ってしまうので、すぐに艇を分解して撤収にかかる。今日は少し早い温泉につかって汗を流して帰ろう。(おわり)

三島孝博

[自己紹介]

PAO会長・栗原隆一の海外放浪記

I 中国・内蒙古編

19 草原との別れ

いよいよこの草原とも別れる日の朝がきた。

初めてこの草原に着いた頃には、早く日本に帰りたい。とも思っていたのだが、今ではもう少しここで生活してみたい、と離れるのが少し寂しく感じられるぐらいに、この草原での暮らしに慣れてしまっていたようだ。

朝早くから撤収と掃除にかかる。

そうしているうちに、たくさんの人たちが集まってきた。今まで、ここでお世話になった人々である。その顔を見ればいろんなことが思い出される。短い間であったが、これまでの人生では味わう事のできなかつた経験、その生活、そしてこの景色。

テント、備品、食器など再び小山のような荷物にまとまり、後はバスを待つだけとなった。

最後に草原でみんなそろっての記念撮影。ボルドーさんの目の上には輝かしくも白いガゼが張り付いている。

そこへ、グワァン、グワァンと車体を上下左右に大きく揺らしながら僕たちの乗るマイクロバスがやってきた。荷物を積み込み、全員が乗り込む。

動き出したバスから振りかえれば、みんながまだ手を振っていた。

しかし、グワァクン、グワァクンと揺れるバスからは、手を振る人たちも、パオもすぐに見えなくなってしまった。

20 再見

シリントホトの空港では、ボルドーさんとの別れとなった。

再見である。中国語の「さようなら」であるが、再見（ツァイツェン）の字から見るとまた会いましょうと言った意味なのであろうか、短い間であったが、大変お世話になり楽しく過ごせたのも多分にこのボルドーさんのおかげであり、まさしく再見である。

空から見る草原も、今日もまたどこまでも緑色に輝き広がっていた。

さて、パオである。草原に置いてきたのであるが、2つのうち、既製品の1つはシリントホトにあるホテルに買い取ってもらった。そして、僕たちが作ったパオは後日、日本へと送ってもらう事になっている。

草原に入るまで、来る時は1週間近くかかったが、帰りは早い。シリントホトからフホトまで移動して1泊。その後、北京へ。北京からは日本まで飛行機である。

神戸から上海まで2日かかった船での移動も飛行機ではあつという間に着いてしまうのであった。

草原での生活のあのゆったりとした時の流れはもう感じる事はできないのであろうか？

エピローグ

日本の生活に戻り、草原での生活のこともすっかり忘れていた頃、パオが届いたと言う知らせが入った。

学園祭の出し物として、グラウンドの隅にたてることになった。
ようやく立ち上げたが、やはり狭いグラウンドでは不釣り合いである。

再び、あの草原の思いがよみがえってきた…。

(おわり)

今回で最終回となりました海外放浪記 I 中国・内蒙古編いかがでしたでしょうか？
次号より第2弾ネパール編をスタートします。

原稿大募集！

PAO通信では、みなさまの原稿を大募集しております。PAO通信・PAOの活動に関するご意見、ご希望また情報や体験談、イラスト・写真もOK。ドシドシお寄せください。お待ちしております。

また、現在PAOのホームページを製作中です。春には開設予定ですので、こちらのほうのご意見もお待ちしております。

アウトドアサークルPAO 栗原隆一

Eメールでも受付中！アドレスは:info@odcpao.com